

## 牧師、バイカー、鮭職人として。。。シェア from LA 第3話「鮭屋にて。デイブのボスが。。。」

その日もデイブはやって来た。「調子どう？」といつも通り聞いてみる。

「ボチボチだね。俺はもう大丈夫だよ。」「そうだね。イエスさまはいつも君を愛してるんだよ。」

「そうだな。感謝。」と答える彼はすっかり大丈夫そうだ。改めて心の中で神さまに感謝する。

しばらくして彼が鮭を3オーダーほどつまんだところで彼の携帯が鳴った。

デイブ：「はい、もしもし。。。え?! 何だって?!! そうか。。。分かった。。。」

ボク：「どうした??」

デイブ：「俺のボス(社長)が今さっき死んだ。。。ジョギング中に心臓発作で。。。」

ボク：「えー?! デイブのボスって歳取ってる人??」

デイブ：「いやとんでもない。彼はまだ若いよ。40歳そこそこかな。すごぶる健康で筋骨隆々、

男前でスポーツマン、若くてキレイな奥さんとまだ小さな2人の男の子がいるよ。けっこう金持ちで、いつもビーチ沿いをジョギングするのが日課だったんだよ。その最中に死んだ。。。」

ボク：「何だって!? 信じられん!!」

デイブ：「ああ、全くだ。。。とにかく今日は俺もう帰るわ。」と足早に去って行った。

それにしても何と言う悲劇だろうか。先月、彼は婚約者を亡くしたばかりで、今度は彼の社長とは。。。

ダビデは、

「ご覧ください。あなたは私の日を手幅ほどにされました。私の一生は、あなたの前では、

ないのも同然です。まことに、人はみな、盛んなときでも、全くむなしいものです。」 詩篇39篇5節

と詠っている。言い得て妙とはこのことだ。人の人生など風前の灯火。いつどうなるか分かったものではない。余談ながら、勤めていたその店もほどなく閉店となった。もともと経営不振だったが、突然スポンサーが降りたらしい。おかげで私もクビになり、生活苦に喘いだ。結局、私がそこに勤めたのはたった1か月半だった。人の命、人の営みや計画が全くアテにならないものであることを思い知らされた。だからこそ、デイブに福音を語れたことは本当に良かった。我々は神を敬い、信頼しないといけないのだ。なぜなら神は、彼を畏れる者を守って下さるから。

あれから10年。人の死による突然の別れと、解雇による生活苦は、私の牧会生活でその後、幾度となく繰り返された。しかし、毎回苦戦を強いられるものこのこまで守られてきた。そして思う。「今日やるべきことをやろう」と。「今日も福音を語ろう」と。今日が最後なのかも知れないから。

